

今こそ環境科学を！

(埼玉大学教育学部) 阿 部 治

1960年代から70年代の環境問題の激化に対応して、科学研究費として環境科学特別研究が始まり、大学にも学部や大学院レベルで環境保護関連学科が生まれた。私が大学に入った頃は、ちょうど環境問題解決の必要性が声高にさげばれていた時である。私は、環境問題全般、特に自然保護に興味をいだき、東京農工大学の環境保護学科に入学した。そして、その後、環境問題解決には自然科学だけでなく社会、人文科学が重要であること、特にその根底には環境教育があることを感じ、筑波大学の環境科学研究科に進んだ。きしくも、両大学とも3期生であった。農工大においても、筑波大においても、学科や研究科の新鮮たる雰囲気の中で、環境科学についての熱っぽい討論を交わした。学生も教官も新しい学科の中で、模索しながらとにかく新しい境界領域である環境科学を創造しようとの熱意があった。

その後、私は幸いに、短い間だったが、環境科学研究科に教員として関わることができた。研究科が、初期の熱意を失ってきたといわれる中、私の接した少なからずの学生たちや教員の何人かは初期の頃とかわらずに環境科学に対する熱意をもっていた。このことが、私にとって嬉しかったことはいうまでもない。しかし、残念なことに、研究科全体としてのポテンシャルは必ずしも高いとは感じられなかった。研究科を取り巻く環境が変化してきたことは事実であり、少なからずの教員の移動や退官といった内的な変化もあったであろう。しかし、私が最も感じたのは、研究組織の硬直化にあるような気がした。学際的科学である環境科学にとって、硬直化こそ最大の命取りである。時代の必然性である地球規模の環境問題が騒がれている今日、研究科が、初心にかえり、真に環境科学的研究成果を求めて、活動していくことを切望する。私自身、研究科OBとして、絶大なる声援を送るとともに協力を惜しみません。

最後に研究科在職中、お世話になった教職員、学生の皆さんに感謝するとともに研究科の益々の発展をお祈りします。